

匠 | モノ語り

TAKUMI

モノづくりには、
人のストーリーがある。

建築家 高橋 潤

AUTOCAD®

自らのイマジネーションさえも 超えていくために

「建築家は芸術家ではありません」。建築家、高橋潤氏は開口一番そういった。「むしろ必要なのはアーティストのセンスよりも、職人的な発想ではないでしょうか?」と問いかける。米国の大学に学び、大手組織設計事務所で幾多の海外プロジェクトを経験してきた高橋氏は、いま一級建築士事務所「DESIGN FIRM」代表としてユニークな作品を次々発表している。そんな「現代の匠」が思う新しい建築家像とはどんな存在なのだろうか?

高橋 潤 (一級建築士 DESIGN FIRM 代表)

1967年12月18日/神奈川県生れ 1993年/早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了 1994~96年/アメリカ留学(コロンビア大学建築学部大学院修士課程了、ハーバード大学建築学部大学院都市計画学科博士課程料) 1996年/株式会社榎総合計画事務所入所 2007年/DESIGN FIRM 設立、明治大学兼任講師 2008年/関東学院大学非常勤講師 2013年/FRSIGN FIRM 一級建築士事務所設立

「家」が育てた建築への思い

大きな吹き抜け。シンプルながらどこにいても家族の気配が感じられる。そんな温もりのある家が好きだった高橋氏。その実家を設計したのは建築家の父だった。「まだ小さい頃、アパートの自室で父が今の実家を設計していたのを覚えています。“マジンガーZの基地のような家にして”なんて隣で無茶な注文を付けたものです」。幼い高橋氏にとって建築の世

界はいつも身近なものだった。図面やスケッチ、積み上げられた建築雑誌。そうした何気ない日々が父親と同じ道を選ばせ、建築家への道を歩ませたのである。「建築家の道に進むように言われたことはありません。でも、父と父の設計したあの家の存在が、今の建築の仕事にもつながっています」。彼は現在父のつくった家の隣に自分の家を建てている。

こだわらないことに こだわる、ということ

“あの建築家の作品”とひと目で分るスタイルを確立し、実作でそれを主張する。建築家にとって当然のこだわりだが、高橋氏は少し違った考え方を持っている。「“こだわらないこと”にこだわる、それがわたしのスタイルです」。まずは自らの創造性をいったん置き、クライアントの要望に向きあってその要望をできる限りそのまま合理的に形にしてみる。すると自分のイメージーションを超えたものが生まれる可能性が高くなる——と高橋氏は考える。このような彼のスタイルがクライアントに喜ばれ、高橋氏にとっても刺激的なデザインが生まれているようだ。

「学生の頃は私も流行に影響され、自分のスタイルにこだわりましたが、なぜその形でなければいけないのか、自分のスタイルを言葉で上手く説明できず、デザインプロセスではいつもひどく苦しみました」。留学時代は自身の恣意的なデザインの浅さを痛感させられる日々だった。

「建築はクライアントからのプログラムと土地、そしてお金がなければ始まりません。創作意欲のままに創れる芸術家とは、出発点に大きな差があります」。クライアントの要望があってからこそ始まる建築は「職人精神」が何より大切であると考えている。自分の恣意性のようなものを前面に出すことなく、クライアントの要望を一つの作品として昇華させていく。それが彼のいう建築家かつ「匠」としての心構えである。

「常識」と「非常識」を徹底した合理性で結ぶ

そんな匠が徹底的に恣意性を排除したことで全く新しいアプローチが見えてきたのが、「新東名高速道路 NEOPASA 清水の商業施設棟」プロジェクトだった。「クライアントの要望が全ての出発点。だから打合せが重要です」。通常は商業施設を中心に、その両脇にお手洗いを置くのが一般的だが、このケースでは商業施設の前面に2基のお手洗いが配置されていた。これではお客様は商業施設によらず、お手洗いだけ使って帰りかねない。

「あまり例の無いこの配置を前提に、まずはクライアントのニーズを満たす方法を考えました」。ポイントは、お手洗い利用者をいかに商業施設に迎え入れるか。高橋氏は商業施設とお手洗いの間に半外部空間を挿入することで、両施設へのアプローチ空間を作り出し、結果お手洗い入口を建物裏側の商業施設に面する側に置いた。商業施設が自然とお手洗い利用者の目に付く仕組みである。まさに、いかに合理的にお客様を導けるかという問いに基づくデザインだ。そんな高橋氏にとって一番の楽しみは「常識的なことと非常識的なことを合理性でマッチング」させること。NEOPASA 清水も、ある意味常識的でない基本構想での配置を逆手にとった合理性追求が、新しい空間性を生み出したのだ。



新東名高速道路 NEOPASA 清水のお手洗い棟（静岡県静岡市清水区 2012 年竣工）。



通常は背面もしくは隅に配置されるお手洗い棟を前面に配した大胆な構成で、正面建物として訪れた際に期待感を裏切らぬよう慎重にデザインされた。

設計：DESIGN FIRM、高橋建築都市デザイン事務所、設計事務所 Gondra



まるでピアニストの ピアノのように

高橋氏は新東名高速道路 NEOPASA 清水のお手洗い棟のユニークな配置検討にいきなり AUTOCAD を使った。「いつも敷地図を取り込んで、配置検討から始めます。最初から構想スケッチなしで AUTOCAD で描いてしまうことが一番多いですね」。後はひたすら AUTOCAD での作業だ。「ペーパー空間のレイアウト機能で、同一図面で一般図と詳細図、平面図と天井伏図もレイヤの ON/OFF で一元化できるようにしています。自由にカスタマイズできるのも大きな魅力ですね」。

天伏も平面図のレイヤーが往復して天伏にして使うことで壁の位置と天井と整合性を取り、天井にある部材で平面に落ちてこないものを付け足すという形だ。

「初めて CAD を使ったのは 20 年前です。当時留学中だったハーバードで AUTOCAD に触れました。初めてだったのに不思議と楽しく覚えられました」。帰国後入所した楨総合計画事務所でも AUTOCAD が普及しており、引き続き使い続けることになった。以来 20 年、AUTOCAD は同氏のクリエイティブに不可欠な道具としてすっかり手になじんでいる。

「左のキー入力だけでショートカットできるように設定し、右手はマウスを離さず操作します。感覚的には鉛筆そのもの。何も考えなくても手が動く、ピアニストにとってのピアノみたいな感じです」。まさに達人の域のディープユーザぶりだが、ふつうに使っていれば誰でもこうなると高橋氏は笑う。

今までにない アプローチを探り続ける

「いま藤沢に建てている自分の家は来年の夏ころに竣工予定です。」高橋氏にとって、戸建ての住宅というのは初めての経験。

「限られた敷地で、いかに広々とした空間をつくりだすか。お手洗い、お風呂、個室うんぬんをどう組み合わせるか。取り組まなければいけないテーマは色々出てきます。そうした中で、建築とランドスケープを等価に扱い、それらを融合したいと思いました。」

また彼は従来の建築の枠を広げるという意味においてバリアフリーというものを、1度きちんと突きつめて考えたいと語る。「バリアフリーというのは、デザイン的にいまひとつになることが多々あるのですが、それを小手先でカッコよく見えるということをやっただけでなくて、違う観点で哲学的に探ってみたいです」という高橋氏。たとえば視覚障害者が、匂いや音、触覚などで空間認知するのだとしたら、その時の空間体験とはどのようなものなのか。

高橋氏は空間認知と異なる認知の仕方で空間を捉えてみることで、常にこれまでと違うアプローチと可能性、今までにない空間のあり方を探し続けている。

 **AUTOCAD®**

CAD ソフトウェアによる
詳細な設計

www.autodesk.co.jp/autocad